

言語文化研究科 言語文化B棟耐震改修工事に関して

1974年4月に当時教養部に所属していた外国語担当教員全員、及び言語実験と言語工学的手法に重点を置く研究スタッフ、ならびに多数の外国人教員によって大阪大学言語文化部は発足し、現在言語文化B棟と呼ばれる建物を拠点に大阪大学の外国語教育を担うとともに、様々な言語文化研究を発展させてきた。このアニュアルレポートの前身である『言文だより NEWSLETTER No. 1』（1984年3月発行）の表紙には、言語文化B棟のまだ新しい感じながらも、ポツネンとした姿の写真が掲載されている。

そのような歴史を持つ言語文化B棟は、建設後35年以上が経過しているため建物全体の老朽化が進んでおり、建物の耐震性能を示す指標（I s 値）も低く耐震補強が求められたこと、さらに大学院生や教職員の構成人数の変化に伴いスペースを効果的に整備、再配置することなどが課題となっていた。これらを解消するため平成27年度から新規概算要求（施設整備費補助金）の国への要求を継続的に続け、平成29年度補正予算において機能強化を含む建物耐震改修工事が認められた。

耐震改修工事は、2019(平成31)年3月から開始され、その年(令和元年)11月に完了した。この耐震改修工事により、建物の耐震補強、老朽化対策、及び効果的な部屋の整備・再配置などが行われ、言語文化B棟の環境整備が図られた。また同時に、A棟の部屋の整備、及び、建物南側の車両道路、歩道、駐輪場等の再整備などの周辺外構整備も併せて行われた。

改修後のB棟には言語文化A棟にあった教員研究室を移動し、言語文化専攻の教員の研究室をすべて配置した。改修後の研究室には洗面台がないので、各フロアーにはリフレッシュルームを設置した。また、部会資料室を教員交流室とし、部会資料室にあった英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、朝鮮語、ギリシャ・ラテン語関係の図書を1階の集密書庫3部屋他に移し、2階には新たにマルチリンガル教育センターのための部屋を作るとともに、3階のLLシステム室をDH（デジタルヒューマニティーズ）ラボとして整備及び名称変更した。

A棟の研究室をすべてB棟に移動することにより、教員・院生の小会議室を3室・学生交流室を3室、研究員室を5室作り、演習室も1室増やすことができた。これにより教員と院生、もしくは院生同士のグループ研究がこれまで以上にやりやすくなり、言語文化専攻の教育研究がより充実して行われることが期待される。

言語文化部を構成していた教員のほとんどが伝統的な文学、言語学の研究者であったが、言語文化B棟、そして言語文化A棟を教育研究の場として言語文化学を発展進化させてきたことを思えば、B棟の耐震改修機能強化工事は、言語文化部が設置されて45年、昭和54年（1979年）の言語文化B棟の竣工から40年の歴史の大きな節目である。これからは言語文化学を担う若い研究者によって、さらなる新しい時代が切り開かれていくことは間違いないであろう。